

九州および南西諸島北部（大隅諸島・吐噶喇列島）での火山活動が活発化しています

11月14日、鹿児島県の桜島で、久しぶりに大きな噴火がありました。夜間に噴火したため、見事な火山雷も撮影されています。それ以外にも、鹿児島県南方沖の諏訪之瀬島で9日未明に爆発的噴火が発生しました。この噴火では、大きな噴石が弾道を描いて飛散する様子も確認されています。

口永良部島も噴火警戒レベル3が続いていますし、霧島火山では、硫黄山で火山性地震の急増や、新燃岳では噴火収束の目処がつかず、観光にも大きな影響が出ています。



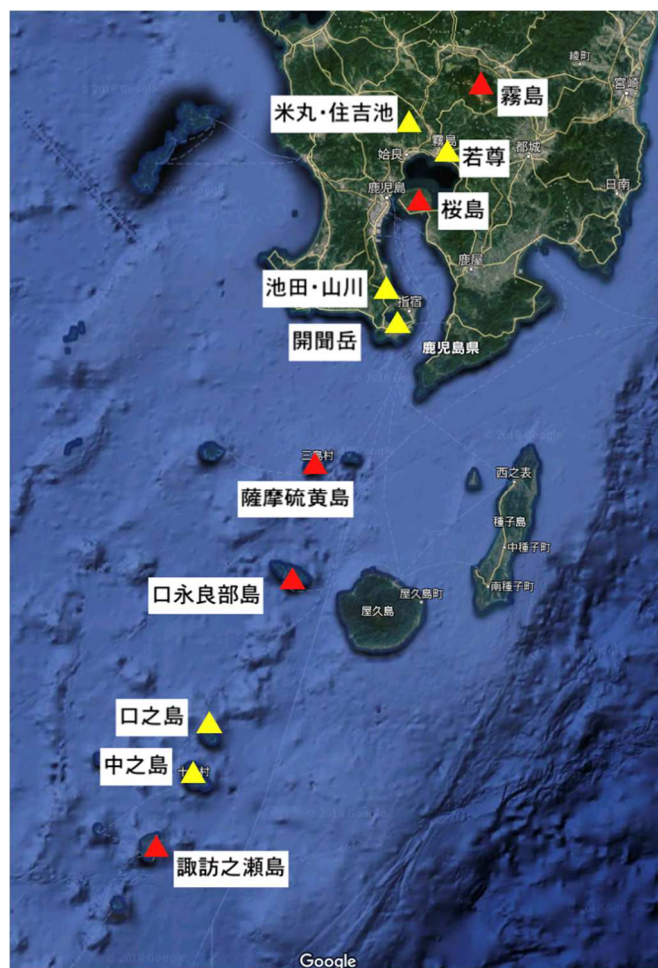
桜島の噴火。11月14日、午前0時43分(鹿児島市)

現在の九州付近の火山の状況

右の図は気象庁による活火山の分布です。赤で示した火山は現在噴煙を上げているもので、全体として火山活動が活発化していると判断できます。ただ、実はこれが普通の状態なのかもしれません。

換言すれば21世紀に入り、火山活動が活発化していると言えるのですが、実は20世紀後半が異例とも言えるほど、火山活動も地震活動も静かな半世紀だったのです。

この時期はまさに日本の高度経済成長期と一致しており、ある意味、自然も我々を助けてくれていたのかもしれません。





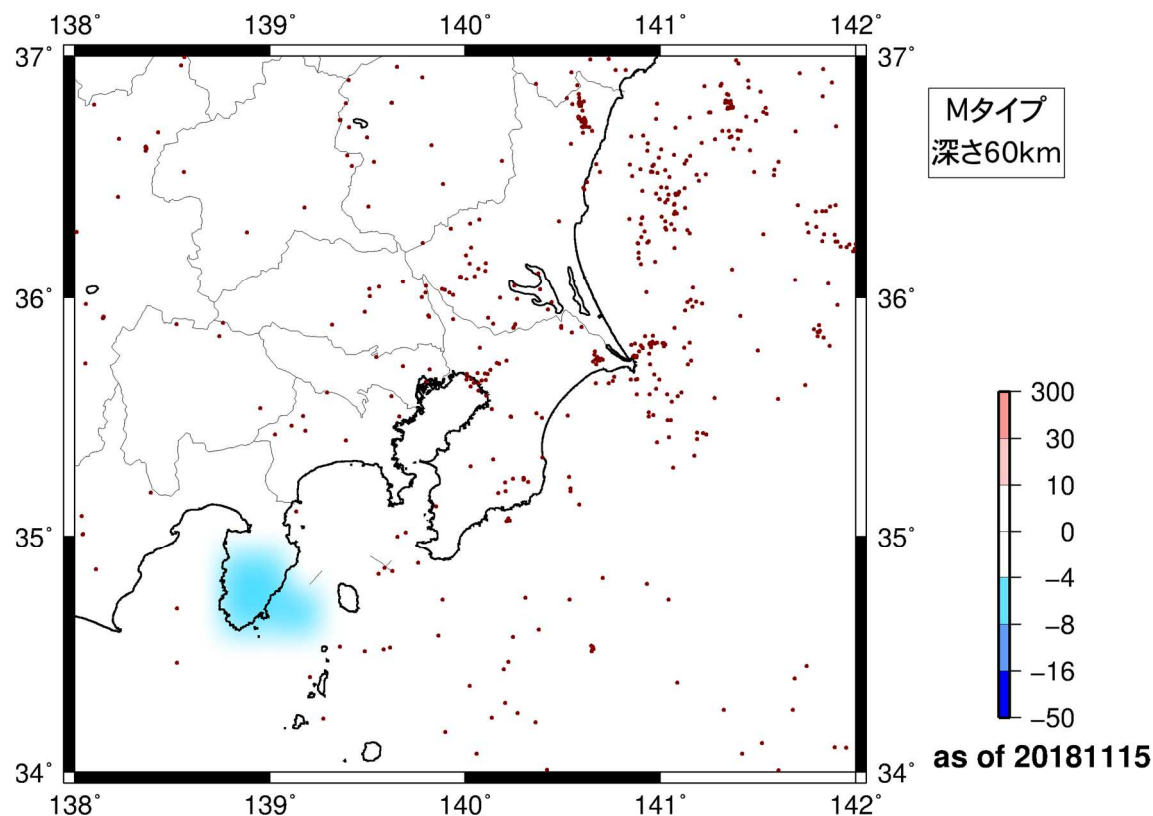
首都圏の地下天気図®

10月5日のニュースレターに引き続き、11月15日時点の首都圏の地下天気図をお示しします。今週は2枚のMタイプの地下天気図を掲載しますが、Lタイプもほとんど同じパターンを示しています。

実は通常お見せしている地下天気図は、深さ0 km（つまり地表）における地下天気図です。これはプレートの沈み込みに関係する地震以外は、ほとんどの地震が深さ30 kmより浅い所で発生しているためです。そしてこれがいわゆる直下型地震というもので、大きな被害を生む事が多いためです。

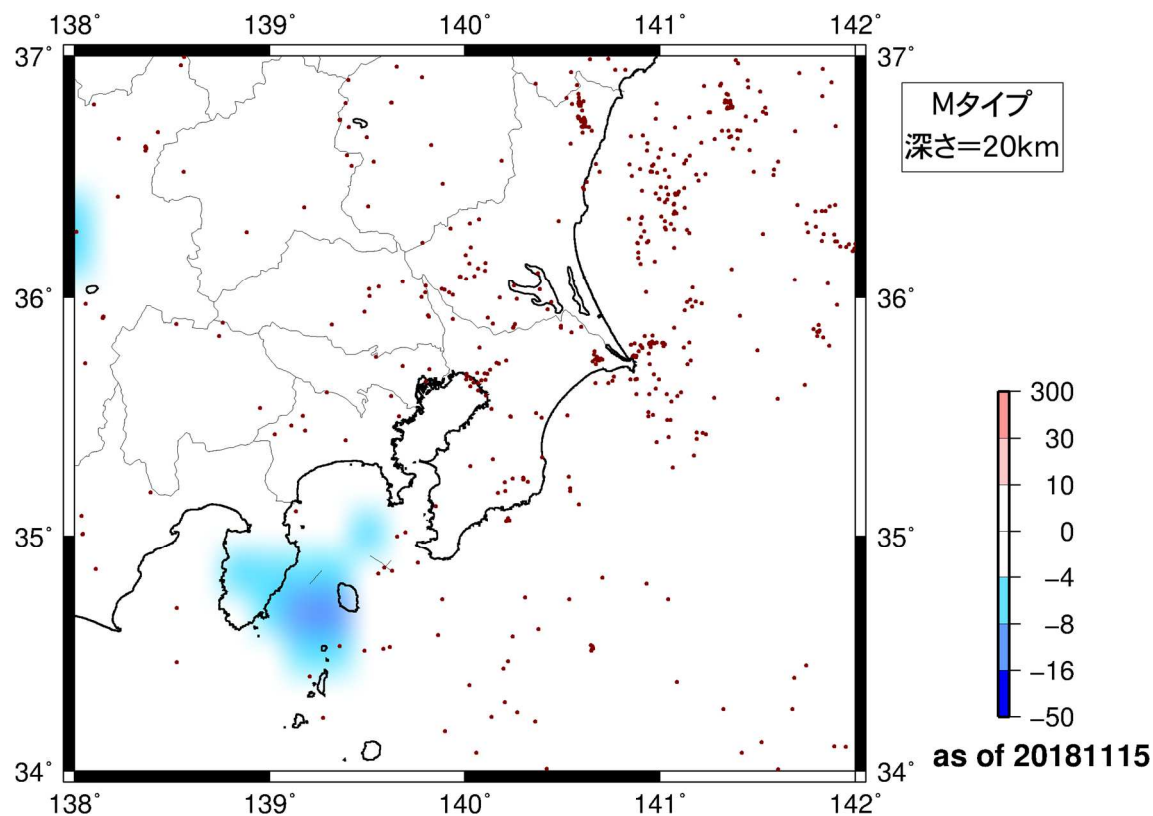
ところが、首都圏はフィリピン海プレートと太平洋プレートという2つのプレートが沈み込んでおり、世界でも有数の複雑な地下構造の場所と言えるのです。そのため、首都圏では、比較的深い所（深さ40 kmとか、60 kmというような深さです）で地震が発生します。

そこで首都圏のみ、解析（計算）を行なう深さを深さ20 kmと60 kmという2つの深さで行っています。



上の地下天気図は、解析の基準を深さ60 kmとしたもので、東京や関東北部でよく有感地震となる深さの地震をターゲットとしたものです。10月5日のニュースレターでも述べましたが、首都圏に顕著な地震活動の異常は観測されていません。

また次のページにお見せする地下天気図は、深さ20 kmで計算を行ったものです。



この地下天気図から、実は前のページで現れていた伊豆半島の異常は、その異常の大きさから、より浅い所にその原因がある事がわかります。伊豆半島東方沖で少し地震活動静穏化の異常が出現しだしたというのが現状です。

それ以外の場所では、地下天気図解析では首都圏に異常は観測されていません。